

G・フローテとその後継者たち : devotio moderna の霊性史

著者	桑原 直己
雑誌名	倫理学
号	29
ページ	1-13
発行年	2013-03-20
その他のタイトル	G. Groote and his successors : A history of the “devotio moderna”
URL	http://hdl.handle.net/2241/119058

G・フロートとその後継者たち

— devotio moderna の靈性史 —

桑原直己

【一】 はじめに

「devotio moderna」とはラテン語で「新しい敬虔」を意味するが、「十四世紀末のネーデルラントで形成され、十五世紀にベルギー、フランス、スペイン、イタリア等のヨーロッパ諸国、特にライン河に沿ってドイツに進出したキリスト教靈性の刷新運動」⁽¹⁾である。

devotio modernaの創始者はG・フロート (Geert Groote、1340-1384) である。その代表的な人物としては、フロレンティウス・ラデーウヘンヌス (Florentius Radewijns、1350頃-1400)、ヨハネス・フォス (Johannes Voss van Heusden、1349-1424)、ゲルハルト・ツェエルボルト・ストンヘン (Gerhard Zerbolt van Zutphen、1367-98)、ヘンドリック・マンデ (Hendrik Mande、1360頃-1431)、ヤン・ファン・スコーンホフエン (Jan van Schoonhoven、1355/56-1432)、トマス・ア・ケンピス (Thomas a Kempis、1379/80-1471)、ヨハネス・ブッシュ (Johannes Busch、1399-1479/80)、ヨハネス・マウブルヌス (Johannes Mauburnus、1460頃-1501)、ヤン・スタンドンク (Jan

Standonck、1443-1504) などの名が挙げられる。

この宗教運動は、中世後期から近代初頭にかけてのキリスト教靈性史の展開の中で極めて重要な意味をもつ。筆者目下の関心は、中世の修道靈性からイエズス会をはじめとする近代以降の修道靈性への展開を跡づけることにある。そのためには、イエズス会の創始者イグナティウス・デ・ロヨラ (Ignatius de Loyola、1491-1556) の『靈操』(Exercitia Spiritualia) を靈性史の中に位置づけることが不可欠であるが、devotio modernaはイグナティウスおよびその『靈操』にも大きな影響を与えている、⁽²⁾と言われている。

しかしながら、現在まで日本では devotio moderna が主題的に取り上げられて研究されることはほとんど無かった。そこで本稿では、イグナティウス・デ・ロヨラとの関係を念頭に置きつつ、フロートを中心に、devotio moderna 運動の歴史的展開をいく簡単に概観することを目的とする。

なおその際、J・エンゲンの近著⁽³⁾に多くを負っていることをお断りしておく。

〔2〕 フローテの生涯と活動

まず、フローテの生涯とその足跡を追ってみたい。フローテは中世の標準では中年と言える三十四歳までの間、聖職者としての地位を追い求めていた。彼は一三四〇年、現在のオランダ東部の都市であるデーフェンター (Deventer) の都市貴族の家庭に生まれるが、一三五〇年、ペストで両親を失う。伯父の後見のもと、一三五五年パリ大学に入学し、一三五八年人文学の修士号および教授資格を取得する。さらに、プラハ、ケルン、アヴィニオン、アーヘンで自然科学・倫理学を学び、再びパリ大学で教会法・神学を学ぶ。

一三七一年からユトレヒト司教区で聖職禄を受けるようになる。この頃から貧しい人々のための奉仕に関わるようになった。しかし同時に、彼はデーフェンターに自分の家を持ち続け、法律家、著述家としても活動していた。

こうした生活様式は十四世紀における典型的な聖職者の姿を示すものであったが、フローテは、一三七四年頃からそうした生活が「不純」であると感じるようになった。これが彼の「回心」であるが、それは外面的には劇的なものではなかった。彼は自らの内面を書き記した日記とでも言うべきメモに「誓願ではなく決意」として、「神への奉仕と敬神のために生活を整える」決意にもとづく彼の「新たな生活設計」を書き記している⁽³⁾。

まず第一に、もはや聖職禄を求めようとはしない。一つを手に入ればもつと手に入れようとする食欲に火がつき、いくつ

かを手に入れば心の平安が損なわれるからである。また、後援者を求めるために、枢機卿や高位聖職者、君主たちに仕えることもしない。自由学芸を無益なものとして放棄し、道徳的な学問分野に専念する。学位を求めず、また名声を得るために書物を書くこともしない。たとえばパリ大学で神学者たちや自由学芸の学士たちが行っている公開討論を、無意味にして挑発的なこととして避ける。そのような人々が「肉欲的に」考えていたがゆえに、神学で学位を求めない。彼は学位なしで学識をもつことができる考える。友人または親類を助けるため以外は、法律や医療に関しての相談に応じることをしない。また特に占星術は行わない。彼にとつてそうしたことは利己心に汚されていると思われるからである。

フローテがこれらの「決意」を書き留めたのは、彼の「回心」の最中のことであり、それはおそらく彼がデーフェンターとユトレヒトに居住していた一三七四／七五年頃のことであるとされている。

要するに、彼にとつての「回心」および「決意」の趣旨は、十四世紀における典型的な聖職者が当然視する特権の追求を「不純な」ものとみなし、聖職者のキャリアを立身的手段として追求することを放棄する潔癖さにある。

この時期のフローテについてはいくつかの特筆すべきエピソードがある。まず、一三七四年から、旧友カルカルのハインリヒ (Heinrich Egger, 1328-1408) 院長のもとでアルンハイム郊外モンニックホイゼンのカルトゥジア会修道院に滞在し

た。一三七五年にはデーフェンターにある自分の家を貧しく敬虔な女性たちの共同生活の場として提供している。さらに一三七七年には、グルーネンダール (Groenendaal) のアウグスチノ修道参事会修道院にルースブルーク (Rusbroec 1293-1381) を訪ね、そこにしばらく滞在している。

フローテは、このように霊的生活に関する糧を求めて各地に修道院を訪問しているが、彼自身は観想修道院での生活を選ぶことはなかった。また司祭叙階も求めなかった。ただ、一三七九年に助祭の叙階を受けた。おそらくそれは、かつてのアッシジのフランチェスコと同じように説教者としての資格を求めたからであろう。かくして彼は、デーフェンターで説教者としての使徒的活動の生活に入る。また同じく一三七九年、かつての自宅で暮らす女性たちに一種の修道生活としての会則を与えている。後述する共同生活姉妹会である。

彼の説教は、書きとめられた可能性はあるが、現存していない。しかし、いくつかのエピソードは伝えられている。

ツヴォーレの貴族の子弟であるヨハン・テン・ワーター (Johann Water) という名のラテン語学校の生徒が、フローテとその仲間たちのもて来者になった。彼は市の有力者たちにケルンの大学で勉強を続けるよう促されたが、フローテはこれを「墮落」、すなわち「勉強の装い」のもとに霊的な善き決定 (bono proposito) から離れさせる誘惑とみなし反対した。フローテは情熱的な書簡で、大学生活には気を散らせる世俗的な誘惑が満ちていることを警告し、自身がパリで学んだ経験を踏まえて「学

生である聖職者があらゆる種類のことがらを学ばなければならない」と考えるのは悪魔のみである、と述べている。フローテは「悪意をもった博学な人間」は最悪である、とまで言う⁽⁴⁾。

一三八〇年の手紙は、某修道会の修練者であるティエルのマテウスという弟子に宛てられ、彼が、見出しうる他の選択よりも安全な、神を喜ばせるような「意図」で修道生活の境位を求めるよう奨励した。しかし、彼は同時に修道院の中でのかきと誘惑についても詳細に警告している。実際、マテウスは困難に出会う。修道誓約をしない在俗助祭であるフローテは、ヨブを引合いに出して語る。「人生は、闘いである。人が闘いなしで霊的な生活 (militare Ⅱ 兵士として戦うこと) を送ることができるとような「場所」(家) も「宗教的身分」(修道会) も存在しない。彼は厳格主義者として法の力を強調している。一旦人が誓いを立てるならば、後戻りは許されない。彼の知人であるある博識な司祭は四つの町で申し分なく勤務していたが、カルトゥジオ修道会に入会した。さらにそれから非常に厳格な隠修士的な生活に入ったが、人々に奉仕し、靈魂の実りを収穫するためにその生活から出た。フローテはそのような生活を認めなかった。結局、フローテはマテウスに誓願を思いとどまらせた⁽⁵⁾。誓願を立てないという自身の態度も、召命に対するこのような厳しい見方によるものである。実際彼は、何人かの弟子たちの修道会入会に反対している⁽⁶⁾。

以上のエピソードから、フローテの思想は、内面の動機の純粹性への要求、そして聖職者および修道者としての召命に対す

るきわめて厳格な考え方を含意していることは明らかである。彼の説教はラディカルなものであり、既存の聖職者たちにとつては厳しい批判として受け止められたであろうことは想像に難くない。そのため彼に反感をもち敵対する者も多く、一三八三年ユトレヒトの司教から説教資格を剥奪された。一三八四年、フローテはデーフェンターでペスト患者の看護にあたっていたが、やがて自らも感染し、急死した。

〔3〕 共同生活兄弟会からヴィンデスハイム修道院へ

（一） 共同生活兄弟会

しかし、フローテの感化を受けた人々は、各地でその精神を実践する共同体である「共同生活兄弟（姉妹）会」(Fraters (Sorores) Vitae Communis) を結成した。一三七九年に、女性たちが共住生活を始め、貧者のために無料宿泊所を開いた。男子の兄弟たちについても、フローテの生存中にすでにデーフェンターとツヴォレ (Zwolle) とカンペン (Kampen) に兄弟会の家が存在していたことが知られている。

フローテの靈性の特色は、上述の彼自身のエピソードからも明らかなように、真にイエス・キリストに従うために自己の内面を徹底的に純化することにあった。フローテの弟子たちも、イエスに忠実に従って自己を内的に刷新するために、イエスの生涯を、特に受難の秘義を中心に絶えず黙想し、自己の靈魂の

うちに神をみいだすこと、日々の生活の中で良心を糾明することを重視した。また、托鉢生活を放棄し、使徒パウロを模範として自らの労働によつて共同体生活を支えることに努めた。具體的な労働内容としては、主として靈的な書物の写本制作、製本、さらには印刷の業務などが中心であった。また後述するように、やがて教育活動に関与もするようになる。

フローテとその同志たちの活動は、ネーデルラントおよびドイツ北部で歓迎され、一四八〇年頃以降、各地で共同生活兄弟会の家が作られていった。この共同体は共同生活は営むものの、既存の意味での修道会ではなかった。会員は修道服を着用せず、既存の修道会に認められていた各種の特権を求めることもしず、貧者を助け、一般信徒も聖職者と生活を共にして上述の靈性を深めることを追求した。彼らは組織体として認められることも望まなかったが、一四三一年に教皇から「共同生活兄弟会」として認可された。彼らは修道会の枠に属さないため、組織としては弱かったが、これを各成員の深い祈りに根ざした靈的生活にもとづく個人としての自立的な靈性によつて克服しようとした。

しかしながら、彼らの生活様式は既存の修道会や聖職者に対する批判を含意していたため、教区聖職者たちや托鉢修道会から敵視され、非難や攻撃にさらされた。

(二) ヲインデスハイム修道院および修族

共同生活兄弟会の生活様式に向けられた非難、攻撃に対して、結局彼らは自分たちの共同体が既存の修道会則に従って生活すれば外部の人々から非難を受けずに自分たちの新しい理想を実現しようと考えようになった。そうした弟子たちの要望をフロレーテも受け入れ、一三八三年にツヴオレに近いウインデスハイム(Windeshim)の共同体にアウグスチノ修道参事会の会則を採用するように指示した。

アウグスチノ修道参事会(Ordo Canoniorum Regularium Sancti Augustini)とは、簡単に言えば教会聖職者が共同生活と清貧とを掲げて修道生活を志す修道会である。そのような聖職者の運動は十一世紀半ばに始まった。そもそもアウグスティヌス(Augustinus、354-430)自身、修道生活への強い志向を持ちながら教会聖職者となることを余儀なくされたため、「聖職者による修道生活」を実践し、その指針となる文書を残していた。これが後世「アウグスティヌスの修道規則」と呼ばれるものであり、十一世紀以来の聖職者たちによる修道運動はこれを規則として採用するに至ったためにこの名で呼ばれている。本質的に一般社会との接点に立つ教会聖職者としての使命と修道生活とを両立させるために、「アウグスティヌスの修道規則」は他の修道規則に比べ比較的自由度が高い。そのため、機動性を持った巡回説教師としての生活を志向したドミニコ会によっても採用されている。おそらく、devotio modernaの精神

にもとづく共同生活兄弟会の人々にとっても、そうした自由さが、自分たちの生活様式に最も近いと感じられたのではないかと思われる。

さらに特筆すべきなのは、フロレーテに大きな影響を与えたルースブルークもまた、グルーネンダールのアウグスチノ修道参事会修道院で修道生活を送っていたことである。

フロレーテの死後、一三八七年ウインデスハイム共同体における六人の弟子たちは、アウグスチノ修道参事会の修道会則に従って修道誓願を立て、フロレーテの後継者としてフロレンティウス・ラーデウエインスを院長とする修道院を発足させた。

その後、ウインデスハイム修道院の修道士数は急速に増え、ウインデスハイムの他に二つの修道院が建てられ、一三九五年にはアウグスチノ修道参事会内の修道院の連合体としての「ウインデスハイム修族」が形成された。フォス(Johannes Voss van Heusden)が修族初代の長上となった。一四二二年にはかつてルースブルークのいたグルーネンダール修道院もウインデスハイムに合併している。その後も修族に加わる修道院は増え続け、一五〇〇年頃には八七に上ったと言う。しかし、修道者たちはdevotio modernaの精神を実践し、祈りと労働のみに専念し、宣教、司牧活動には携わらなかった。

ウインデスハイム修族は大きな成功を収め、一四三五年のバーゼル公会議では、ドイツにおけるアウグスチノ修道参事会全体の修道院改革がウインデスハイム修族の手に委ねられ、その結果ウインデスハイムの影響力はさらに大きなものとなった。

【4】 devotio moderna と学校教育

十四世紀後半までには、ネーデルラントの多くの街には十代の少年のためのラテン語学校が開かれていた。これらの学校は、司教座聖堂参事会、都市、教区によって創立され、維持されていた。デーフェンターの司教座聖堂付属学校とツヴォーレの市立学校は特に有名であった。リエージュ、オランダ、ウェストフリア、そして低地ライン地方などのあらゆる近隣地域から多くの若者たちが集まっていた。

学校は全体では九学年からなるが、現代の通常の数え方からは逆に数える。最上学年である第一学年と第二学年の生徒は、下級生のための教師をつとめる。第三学年までに文法と論理学の基礎を習得するが、大部分の地方の学校はそこまでである。上級二学年を含む九学年をすべて有するのはデーフェンターとツヴォーレの学校のみであった。上級二学年で哲学の基本を学び、学生に大学に進む準備をさせる。

学資は両親が負担するが、家庭の経済状況によってはそれは重い負担を意味していた。教育は、彼らの息子たちの名声と将来を高めるものであった。しかし、devotio moderna の兄弟たちの目には、両親たちの思いとは反対に、こうした数多くの生徒たちは、「はかない野心と出世第一主義の世界に迷い込もうとしている少年たち」と映った。

これらの学校の十二〜十九歳の生徒たちは、devotio moderna のほとんど最初期からその重要な一翼を担うようになっていっ

た。ラテン語学校と devotio moderna の兄弟たちとの結びつきは深い。フロートの手紙は八〇通ほど現存しているが、そのうち四分の一以上は、教員たち、特にデーフェンター、ツヴォーレとカンペンの教員たちと交換されたものである⁽⁷⁾。特にツヴォーレの学校長ゼーレ (Johannes Cale' 1345頃-1417) は、フロートと特に親交のあった人物として知られている。

フロレンティウス・ラーデウエインスは、生徒を写字生として自分のグループに引き寄せて、その地の教師との良好な関係を深めた。後述するトマス・ア・ケンピスの兄ヨハネス (Johannes' 1365-1433) は優秀な写字生、照合者、編集者として名を残しているが、このようにして同志に加わった。ブッシュは、ツヴォーレの学校が八〇人以上の生徒数を誇った際に、フロートの親友である前述ゼーレ校長 (在任1378-1417) に、愛情のこもった肖像を献呈した。このように、devotio moderna の兄弟たちとラテン語学校の教員たちとの間には、目的を同じくする僚友としての親密な関係が認められる。

学寮には一人の devotio moderna の兄弟が監督として配属され「寮監」(procurator) と呼ばれた。彼らはしばしば「学院長」(rector scholarium) とも呼ばれたが、兄弟の家の院長と混同してはならない。寮監として兄弟は学生の衣食住の世話をし、学生は兄弟の敬虔な生活に接することで大いに感化を受けた。devotio moderna の兄弟は学校の教員ではなく、このようにして生徒たちの日常生活を世話することによって「人格形成」に貢献するのが当初の役割であったが、「学校教育」と「人格形成」

という組織的に異なった目的はやがて必然的に混交された。寮監の兄弟は、実際には勉強を手伝った。生徒たちは午前中、学校へ出かけた後午後には寮に戻って「復習」(repetare)を行った。このように文献を暗記するまで自分のものとすることは中世の基礎教育にとっては不可欠なことであった。寮監の兄弟は、実質的にはここで家庭教師の役を果たし、その結果彼らの施設は「聖職者の学校」(schola clericorum)と呼ばれるようになる。フローテの協力者であった前述のツヴォレ学校長ゼーレは、パリ大学の学制を参考にして人文主義的な教育課程を採用したが、このことが *devotio moderna* と人文主義との結合をもたらすこととなる。デーフェンターの学校はヘギウス (Alexander Hegius、1433頃-1498) が校長であった時代にはドイツ人文主義の中心となった。彼は、イタリアの人文主義に倣い、ラテン語とギリシア語の教育に力を入れた。多くの卒業生が学校教師になったため、ヘギウスの教育方針は広く普及することとなる。*devotio moderna* と人文主義とは、相補的な関係の中で発展していった。ドイツやネーデルラントは民衆の信仰心が篤い地域である。そのような地域に、革新的な知的運動としての人文主義が根を下ろすことができたのは、それが *devotio moderna* と結びついていたためである。他方、*devotio moderna* を担っていた兄弟会や修道院は、ラテン語学校の卒業生のなかから会員を得た。そして、十五世紀には、ネーデルラント全域、ドイツ、ポーランドの各都市に一二〇以上の家を擁し、教育と宗教との分野で活躍することができた。

こうした *devotio moderna* と人文主義との結合は、やがて宗教改革によって打撃を受ける。しかし、*devotio moderna* と結びついた人文主義教育の学校では、ニコラウス・クザーヌス、エラスムス、ルター、シュトゥルムといった多くの人材が学んでいる。これが「ドイツ人文主義」の伝統を形成する。*devotio moderna* と結びついた人文主義的な学校教育の実践は、直接的・間接的に後世のギムナジウム、コレギウム、イエズス会学院に制度的な基礎を与えることとなる。

[5] フローテの後継者たち

(1) *devotio moderna* 指導者列伝

以上の概観を踏まえ、以下ではフローテの精神を受け継ぎ、*devotio moderna* 運動の展開を指導していった主な人物について、個別的に簡単な事典風の紹介をしておきたい⁽⁸⁾。

(a) フロレンティウス・ラーデウエインス

フロレンティウス・ラーデウエインスは、一三五〇年頃、現在のオランダ中南部の都市レールダム (Leerdam) に生まれる。プラハ大学で学び、一二七八年にネーデルラントに帰国後、ユトレヒトの参事会員などを務める。デーフェンターでフローテと出会い、彼の説教や活動から深い霊的感化を受けて同志となる。一三八〇年ヴォルムスで司祭に叙階され、同年、フローテとともにデーフェンターで共同生活兄弟会の初期指導者となる。

フロレーテの死後は彼の後継者として *devotio moderna* の運動を指導するが、上述の経緯により一三八七年、ヴィンデスハイムの共同体をアウグスチノ修道参事会修道院として創設した際に初代院長となった。さらに同院を中心とするアウグスチノ修道参事会ヴィンデスハイム修族の組織化に際しても主導的役割を果たした。一四〇〇年にデーフェンターで没している。

フロレーテの早すぎる死の後、*devotio moderna* 運動の担い手は、ほとんどがフロレンティウスの感化のもとから輩出している。フロレンティウスの人柄については弟子であるトマス・ア・ケンピスが記した伝記によって窺い知ることができる。彼は自分が指導する人々に対して、謙遜な奉仕者として常日頃からキリストに従う生き方を説き、聖書や靈的著作を通して神と内的な対話を深めることを勧めていた、と言われている。

(b) ヤン・ファン・スホーンホフェン

正式名をヤン・ディリクス(Jan Dirks)ないしヨハネス・テオドルシ(Johannes Theodoric)・ファン・スホーンホフェンと言う。一三五五/五六年に現在のオランダ中部にあたるスホーンホフェンに生まれる。一三七四年パリ大学で哲学の学位を取得し、一三七七/七八年ルースブルークの影響下にあるアウグスチノ修道参事会グルーネンダール修道院に入会した。一四〇九/一〇年グルーネンダール修道院長、一四二二年に同修道院がヴィンデスハイム修道院と合併した後には副院長および修練長を務めた。一四三二年、グルーネンダールで没す。

彼の師であるルースブルークを、時のパリ大学総長である

ジャン・ジェルソンが批判していたことはよく知られている。この点に関し、師ルースブルークの見解は教父らと一致するとして擁護する小論『現世を蔑視することについて』(*De contemptu huiusmundi* 1419 頃)を著している。

(c) ヘンドリック・マンデ

一三六〇年頃、現在のオランダ南西部の都市ドルトレヒト(Dordrecht)に生まれる。ホラント伯の宮廷書記官であったが、フロレーテの説教に感化され、*devotio moderna* 運動に身を投じる。フロレンティウス・ラーデウエインスと共に共同生活兄弟会に加わり、後にヴィンデスハイム修道院に入る。マンデは神秘体験の人であった。キリストの受難を幻視したと言われている。司祭になることは望まなかった。祈りと黙想に専心しつつ、写本の筆写と挿絵を描く手仕事の生活に明け暮れた。一四三一年、ベーヴェルウエイク(Beverwijk)で没した。オランダ語で著作を著している。主著は『(回心した人間の)三つの状態についての書』(*Een boeckijin van drie Staten*)。

(d) ゲルハルト・ツェルボルト・ズトフェン

ゲルハルトは、一三六七年、現在のオランダ東部の都市ズトフェンの宗教的に熱心な市民家庭に生まれた。彼の父ツェルボルトはおそらく市の参事会員であった。ゲルハルトはデーヴェンターのラテン語学校に通った後、ケルンで学んだが、法律、神学と敬神の訓練についてはほとんど独学であった。彼は熱心な学生で「本の虫」であったが、伝えられるところでは、休日で授業がないときは深く悲しみ、自分の個室に閉じこもり、窓

を開けて新鮮な空気を入れることもクモの巣を払うこともせず
に、義務として割り当てられた時間を越えて、本を書写したり
執筆したりすることに専念していたと言う。彼はよくできた書
物を愛好し、二十代の中頃にあたる一三九〇年代初頭には、共
同体の司書と呼ばれ、フロートおよび共同体共有の書物の管理
にあたっていた。フロレンティウスの信頼篤い実務家で、フロ
レンティウスが「家の問題を処理する」際には彼の助けを
頼り、「法律問題万般を」彼と共に考えたと言う。

著書としては、『霊的上昇について』(*De spiritualibus
ascensionibus*)、『内的人間あるいは靈魂の諸力の改革について』
(*De reformatione interioris hominis seu virtutum animae*)が重要である。

(e) トマス・ア・ケンピス

家名によるならば、彼の名はトマス・ヘメルケン (*Hemerken*)
であるが、出身地にちなんで「トマス・ア・ケンピス」と呼ば
れるのが普通である。

彼は一三七九／八〇年、ドイツのケルン北西の街ケンペンで
職人の家庭に生まれる。すでに *devotio moderna* と出会い、ア
ウグスチノ修道参事会のヴィンデスハイム修道院にいた兄ヨハ
ネスの勧めに従って十二十三歳頃デーフェンターのラテン
語学校に入学し、五年間勉学に励んだ。デーフェンターの学寮
において、共同生活兄弟会の兄弟の感化を受け、祈りと勉学の
生活を体験した後、一三九九年ツヴォーレ郊外のザンクト・アグ
ネーテンベルク修道院に入った。一四〇六年に修道誓願を立て、
一四一三／一四年に司祭に叙階された。一四二五／二一年およ

び一四四五年、副修道院長、財務担当、修練長などの職務を果
たした。七〇年余にもおよぶ修道生活を送り、アグネーテンベ
ルク修道院で一四七一年に没した。

彼は多くの人々に後述する『イミタティオ・クリステイ』の
著者と信じられてきた。他に彼の作であることが確定している
数多くの霊的著作を残している。また彼の靈性は恩師フロレン
ティウス・ラーデウエインスの指導と感化のもとに成立してお
り、著作の中には師の伝記が含まれている。

(f) ヨハネス・ブッシュ

ブッシュは、一三九九年ツヴォーレに生まれる。*devotio
moderna* の影響を受けて、一四一七年にヴィンデスハイム修
道院に入る。彼は修道院改革者として活躍している。バーゼ
ル公会議の命を受けてヒルデスハイム修道院改革などに着手
し、教皇特使としてアウグスチノ修道参事会の巡察師を務めた。
一四七九／八〇年、自らが改革したヒルデスハイム修道院で没
している。ヴィンデスハイム修族の年代記や修道院改革につい
ての記録を書き残している。

(g) ヨハネス・マウブルヌス

ヨハネス・マウブルヌスは、トマス・ア・ケンピスの死から
約十年後、ザンクト・アグネーテンベルク修道院に入った。こ
こで修道生活の養成を受けた後、フランスに派遣され、サン・
ヴィクトール修道院を含む修道参事会の改革のために働いた。
逆説的な事実であるが、サン・ヴィクトール修道院はヴィンデ
スハイム修道院がその成立当初指導を仰いでいた修道院であっ

た。マウルブルヌスは、それらの修道院のために一連の「靈的訓練」(*exercitia spiritualia*、「靈操」)⁽⁹⁾の方法を示した。この訓練はその究極的起源は *devotio moderna* の兄弟たちに遡るものであり、毎日の自己内省、写字生としての毎日の仕事、悪癖との絶えざる闘いと徳における進歩、そして靈的読書のリストをも含んでいる。そこから、彼による *devotio moderna* 靈性の集大成である『靈的訓練と聖なる黙想のバラ園』(*Rosarium exercitiorum spiritualium et sacramentum meditationum*) が結実している。

(h) ヤン・スタンドンク

ヤン・スタンドンクは一四四三年、現在のベルギー北部の都市メヘレンで生まれた。*devotio moderna* の影響を受け、パリで神学の博士号を得た後、そこに共同体を組織した。それは、初期 *devotio moderna* の兄弟たちが開いた貧しい学生のための学寮に倣ったものであった。一四八三年に、彼はパリ大学モンテーギユ学寮の改革を手がけ、基金を確保して八六人の貧しい学生——うち神学部生は十二名、残りは神学部の前段階にあたる人文学部生——を支援した。スタンドンクは、厳格さで有名であったが、その活動をカンブレ、メヘレン、ルーヴァン、バランシエンヌ、その他の地域にまで広げた。各々の街で、彼は大学または大学の前段階の学生のために *devotio moderna* の兄弟たちに倣った学寮を設立した。そこでは、学生たちの道徳的、宗教的、学問的な生活を形成するための厳しい規定が設けられていた。

(二) 『イミタティオ・クリステイ』

キリスト教世界において聖書に次ぐ古典として多くの人々に読まれてきた修徳書『イミタティオ・クリステイ』(*De Imitatione Christi*「キリストの模倣」の意)は、*devotio moderna* の靈性を最も端的に伝える書物とされている。後述するとおりイグナティウス・デ・ロヨラの『靈操』に影響を与え、イエズス会士たちの必携の書であり、すでにキリシタン時代に『コンテンツスマンデ』の題名で邦訳されている。

多くの人々は本書をトマス・ア・ケンピスの作として扱っているが、今日にいたるまで本書の著者および成立については決定的な説はない。十五世紀以来、フロレーテ、トマス・ア・ケンピス、ジェルソン等、著者の候補として三十五人ほどの名が列挙され、数世紀にわたって論争が交わされてきた。しかし現在まで、どの説も確実な裏づけとなる証拠を得ていない。しかし、本書が *devotio moderna* の靈性にもとづく修道司祭の手になるものであり、*devotio moderna* の思想を典型的に示すものであることは間違いない。

本書は、著者自身の靈的体験に基づいていることが窺われる。内容的には、人間が徹底的な自己放棄のうちにキリストに従うための道を説いている。具体的には、あらゆる欲望を断ち切り、自己愛をことごとく捨て、徹底的な謙遜を身に着け、従順によって自己意志を放棄し、自分の内面に目を向け、熱心な祈りによって神の恵みを請い求め、自分のすべてを完全に神に委ね、キリ

ストの苦しみに快く参与することが求められている。その結果、人は心の自由を得、熱烈な愛によつてキリストと一致し、神と一つになることが説かれる。第三、四巻は神（キリスト）と人間の対話形式をとり、第四巻は聖体拝領によるキリストとの一致を取り扱っている。

〔9〕 devotio moderna とイグナティウス・デ・ロヨラ

以上の紹介を踏まえ、ここで devotio moderna とイグナティウス・デ・ロヨラとの関係について触れることとしたい。devotio moderna の影響という点では、イグナティウスはジャン・カルヴァンと共通している点が指摘されている。

イグナティウスもカルヴァンも、上述ヤン・スタンドンクの影響のもと、devotio moderna の精神を色濃く伝えるパリ大学モンテーギュ学寮で過ごし、その精神と靈的訓練との影響を受けた。イグナティウスとカルヴァンは共に徹底的な内面性を中心に置く宗教思想を展開し、十六世紀後半には、彼らの弟子たちはヨーロッパにおける靈的なリーダーシップをめぐって戦うことになる。神の前で魂を形づくり再構築する内面性への激しい傾倒は、一般に十五世紀の信仰生活に特徴的であり、十六世紀においてもプロテスタントとカトリック、修道士と一般信徒の別を問わず見られるものであった。

イグナティウスは一五二八年に、外面的にはすでに三十七才に達した貧しい男性としてモンテーギュ学寮に入り、学寮の授

業と靈的訓練に従った。イグナティウスは、一五四〇年の会憲において、特に彼の共同体を「ordo」ではなくに「societas」と命名することを選んだ。そして、その目的のために、彼は devotio moderna の兄弟たちが彼らの靈的な目的について語るためにカッシアヌスから引き継いだギリシア語 skopos に由来する「scopus」という用語を用いている。こうした点でイグナティウスには devotio moderna の影響が認められる。

イエズス会士たちは、devotio moderna の姉妹、兄弟たちと同様に、世界の中に留まる信仰生活の形態を採用した。そして、イグナティウスがその世界の中で自分たちの靈的生活を形づくりに、支えるために規定したものは、これまた devotio moderna の姉妹、兄弟たちと同様に「訓練 exercises（ラ：exercitia）」の名で呼ばれる靈的实践であった。さらには、イエズス会修練者に割り当てられる靈的読書は、『イミタティオ・クリステイ』であり、イエズス会士はそれを携帯するものとされていた。

さらに、イグナティウスは、パリでの修学期以前にすでに、devotio moderna の影響を受けている。トマス・ア・ケンピスのみならず、上述のゲルハルト・ツエルボルト・ズトフェンの『靈的上昇について』とヨハネス・マウブルヌスの『靈的訓練と聖なる默想のバラ園』という著作は、カタロニアの改革的なモンセラート修道院長ガルシア・デ・シスネロス(Cisneros、1493-1510)の『靈的生活の訓練』(Exercitatorio de la vida espiritual, 1500)に深い影響を与えたと言われている。この著作は修道者と巡礼者のための靈的訓練の手引書であり、一五二二年にモンセラ

トを訪れたイグナティウスは、おそらくこの書にもとづいて黙想の指導を受けたものと考えられている⁹⁰⁾。

〔7〕 総括

—— devotio moderna の靈性史における位置づけ

最後に devotio moderna の靈性史上の位置づけについて、一瞥を与えておきたい。

エンゲンの近著は devotio moderna を中世における「回心」の伝統の中に位置づけた上でその歴史を検討している。具体的には、フランススコ会に代表されるような托鉢修道会に見られる中世盛期の宗教運動およびその前夜ともいべき巡回説教者たち、そしてベギンやベガルダたちなどの活動を視野に入れている。エンゲンが「回心」と呼ぶのは、通常のキリスト教的生活には飽きたらず、より完全にイエス・キリストに従うことを求めることを意味し、特に徹底した自己放棄の可能性を追求するラディカルな志向を意味する。特に、そのラディカリズムは自発的清貧の徹底という形をよくとる。そのような志向は往々にして教会や修道制における既存の在り方に対する批判を含意するため、敵対者からの批判にさらされることが多い。その結果、異端視されたり、実際に正統教会と敵対して異端となったりする例も多い。

筆者はこれまでに修道制の端緒から托鉢修道会の成立までの修道靈性史を概観した拙著をまとめているが⁹¹⁾、そこで筆者は

エンゲンが「回心」と呼ぶところのものを、修道制の原点につながる「隠修士への志向」という形で捉え、東西修道制の歴史の展開を「隠修士への志向」を軸として概観している。エンゲンが「回心者」の歴史の中に位置づける devotio moderna は、筆者の用語によればこうした「隠修士への志向」が中世後期から近代初頭にかけてさらに展開したものである、と言うことができる。

すでに筆者は別稿⁹²⁾でベギン運動の展開について検討した。そこで明らかにしたのは、ドイツではベギン運動が異端視されて消えてゆくのに対して、ネーデルラントではベギンたちは司教や君主たちにより保護され、ベギンホフと呼ばれる専用の自治的な居住空間を獲得した結果、ベギンという宗教生活の形態はその後長きにわたって存続したという事実である。つまり、ネーデルラントの地は自由な個人による自立的な靈性を育む独自の宗教風土があつたのであり、これが devotio moderna 運動を生む土壌を形成していたと考えられる。無論、フロレーテの「共同生活兄弟会」から「アウグスチノ修道参事会ヴィンデスハイム修族」への展開の歴史が示すように、徹底した「回心」者が既存の修道制の枠外で生きることには、ネーデルラントの地においても困難があつたのではあるが。

また、本稿においては devotio moderna と学校教育との密接な関連に注目した。この意味でも、devotio moderna はイグナティウス・デ・ロヨラにはじまるイエズス会の先駆的存在であつた。イエズス会は学校教育の領域において活躍する近代的な修

道会の草分け的存在として知られているからである¹³。イエズス会はその成立当初から教育事業を目的として設立された修道会ではなかった。しかし、イグナティウス自身をはじめ、初期イエズス会士たちはパリ大学で学び、人文主義的な教育を自らのものとしていたことがイエズス会を教育事業と結びつけることとなる。そしてイエズス会の霊性自体、*devotio moderna*の影響下に形成されたものであることは【6】節で紹介したとおりである。さらに、人文主義と *devotio moderna* との結合ということがイエズス会の霊性を準備していたのである。

注

- (1) 上智学院新カトリック大事典編纂委員会編、『新カトリック大事典』研究社、1996-2010年、見出し「デヴォティオ・モデルナ」。
- (2) Engen, J. V., *Sisters and brothers of the common life : the Devotio Moderna and the world of the later Middle Ages*. University of Pennsylvania Press, 2008.
- (3) Engen, op. cit., p. 12.
- (4) Engen, op. cit., p. 46.
- (5) Engen, op. cit., pp. 46-47.
- (6) Engen, op. cit., p. 47.
- (7) Engen, op. cit., p. 144.
- (8) 本節の紹介は、主として前掲『新カトリック大事典』および

び Engen の前掲書による。

- (9) 「霊操」の語はイグナティウスの『霊操』の訳語として定着しているので、一般的な意味での *exercitia spiritualia* の訳語としては「霊的訓練」の語を用いることとする。
- (10) Engen, op. cit., p. 318.
- (11) 拙著『東西修道霊性の歴史―愛に捉えられた人々―』知泉書館、2008年。
- (12) 拙稿「霊性史の背景としてのベギン」（清泉女子大学キリスト教文化研究所年報第二十一巻）、2013年。
- (13) イエズス会教育については以下の拙稿を参照。
拙稿『イエズス会学事規程』におけるイエズス会学校」（清泉女子大学キリスト教文化研究所年報第十六号）、2009年。

（くわばら・なおき 筑波大学人文社会系教授）